

# ヤングケアラーに関する実態調査について

## 1. 目的

- ヤングケアラーは、家庭内のデリケートな問題であることから表面化しづらく、また社会的な認知度も現時点において低いため、周囲の大人のみならず、子ども自身も自覚がない場合が多いことで、適切な支援に結び付いていないことが課題。
- 経済財政運営と改革の基本方針2021（令和3年6月18日閣議決定）においても、「ヤングケアラーについて、早期発見・把握、相談支援など支援策の推進、社会的認知度の向上などに取り組む。」とされている。
- 大分県内のヤングケアラーの実態を把握し、今後必要な支援施策の検討を行うため、大分県においてヤングケアラーに関する実態調査を実施した。

## 2. 調査概要

### (1) 市町村要保護児童対策地域協議会における調査

各市町村の要保護児童対策地域協議会で共同管理台帳に登載しているヤングケアラーの数を調査（令和3年5月）。

⇒ヤングケアラーとして共同管理台帳に登載されている件数：67件

### (2) 先行調査

県内の学校教職員、福祉・医療の在宅サービス関係者、民生委員・児童委員、子ども食堂関係者等を抽出して、ヤングケアラーとして認知している児童・生徒数、ケアの対象者及びその内容など、日常の業務で把握しているヤングケアラーの状況を調査（令和3年7月～8月）。

⇒先行調査からの推計：県内に約300人のヤングケアラーが存在

### (3) 全体調査

公私立学校の小学校5年生から高等学校3年生の全児童・生徒（対象約8万人）に対して、ヤングケアラーとしての自覚、ケアの対象者及びその内容・時期・頻度などの現況、相談先や求める支援など、ヤングケアラー自身の状況を調査（令和3年10月～11月）。

<回答率>

	生徒数※	回答数	回答率
小学生（5年・6年）	19,500人	16,628人	85.3%
中学生	29,624人	24,283人	82.0%
高校生	30,426人	16,348人	53.7%
合計	79,550人	57,259人	72.0%

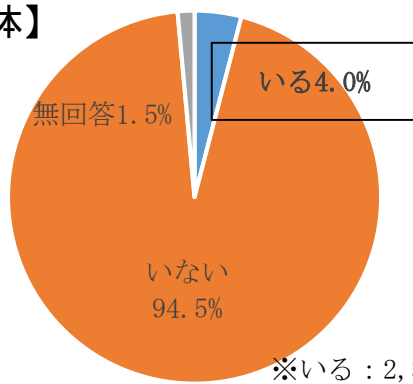
※出典：大分県「学校基本調査」

# ヤングケアラー等に関する実態調査 ～全体調査の主な結果①～

- 世話をしている家族が「いる」と回答したのは、回答者全体で**4.0%**（[参考]国調査 中2：5.7%、高2：4.1%）
- 世話をしているため、やりたいけれどできていないことが「ある」と回答したのは、回答者全体で**1.3%**
- 世話をしていることで、「学校に行きたくてもいけない」と回答したのは24人、「進路変更を考えざるを得ない」と回答したのは40人など、深刻な影響を受けている児童・生徒も存在（重複回答あり）

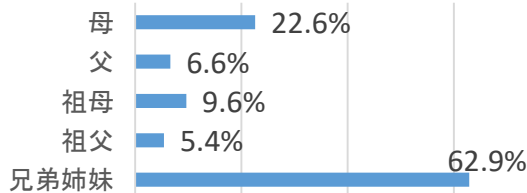
※世話の内容の自由記載の例：「学校から帰ったらすぐに保育園に迎えに行かなければならないので休む時間がない」「体温や血圧の測定、薬の準備」、「アルバイトをして家計を支える」

## 【全体】

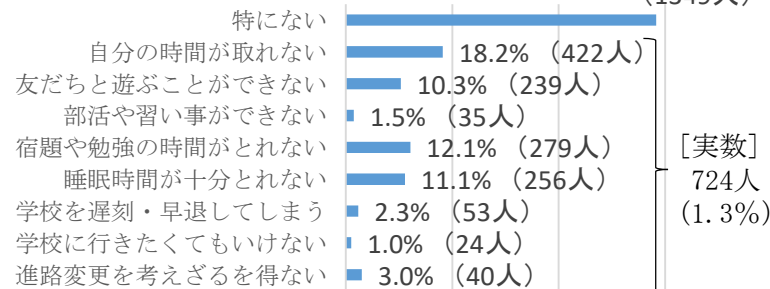


※いる：2,315人

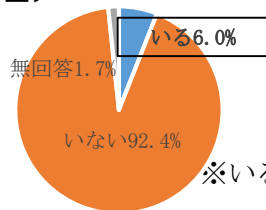
「いる」と答えた人のうち、世話をしている家族の内訳（複数回答）



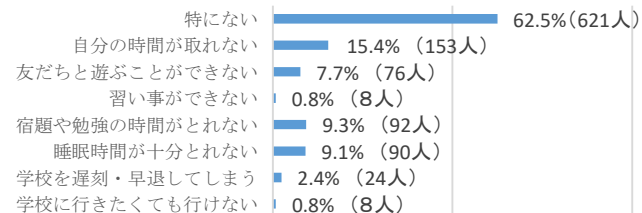
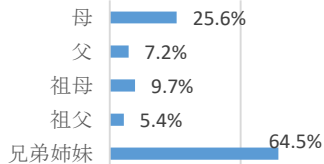
世話をしているために、やりたいけれどできていないこと（複数回答）



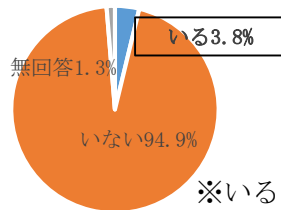
## <小学校5・6年生>



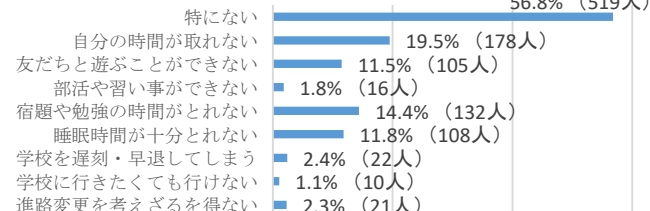
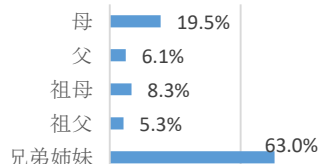
※いる：993人



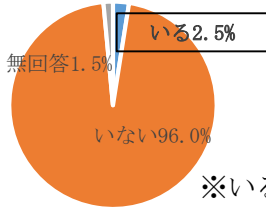
## <中学生>



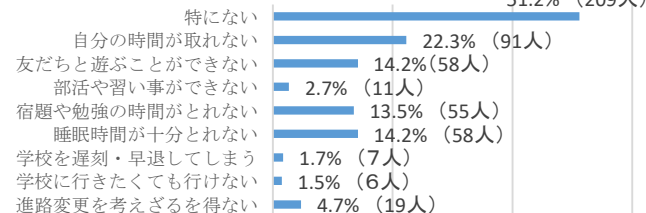
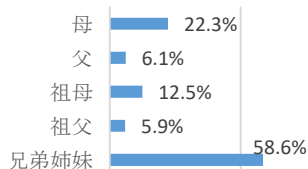
※いる：914人



## <高校生>



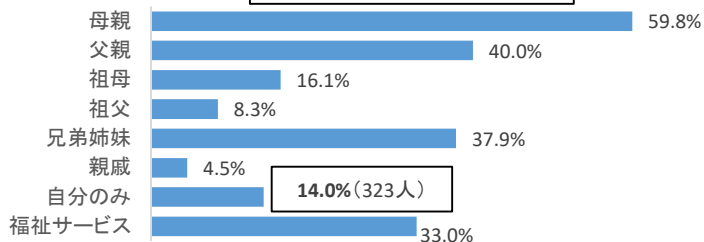
※いる：408人



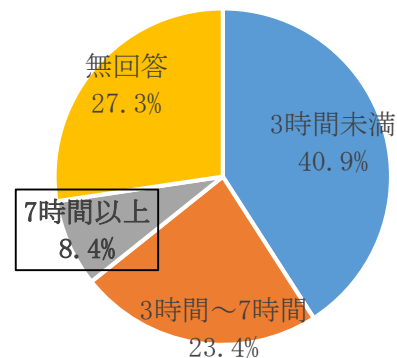
# ヤングケアラー等に関する実態調査 ～全体調査の主な結果②～

- 一緒に世話をしている人がおらず「**自分のみ**」で世話をしていると回答したのが、世話をしている家族がいる者全体の**14%**
- **世話を始めた年齢が「就学前」と**回答したのが、世話をしている家族がいる者全体の**5.6%**
- **1日当たりの世話時間が7時間以上**と回答したのが、世話をしている家族がいる者全体の**8.4% (平日)**、**20% (休日)**
- 学校や大人に助けてほしいことや手伝って欲しいことでは、「**自由に使える時間が欲しい**」が**11.6%**  
※自由記載の例：「父親が家事や世話をすよう説得して欲しい」、「スーパーに一人で行くことが多いので手助けして欲しい」
- 世話をしている家族別の世話をすることに感じているきつさでは、「**兄弟姉妹**」を世話している場合「**特にきつさは感じていない**」と回答した者が全体で**72.4%**で最も高い

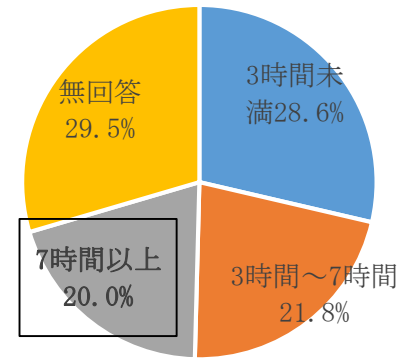
一緒に世話をしている人



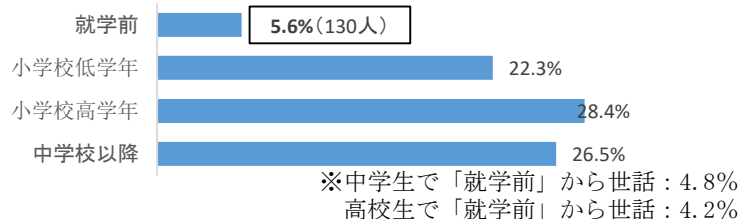
平日 1日あたりの世話時間



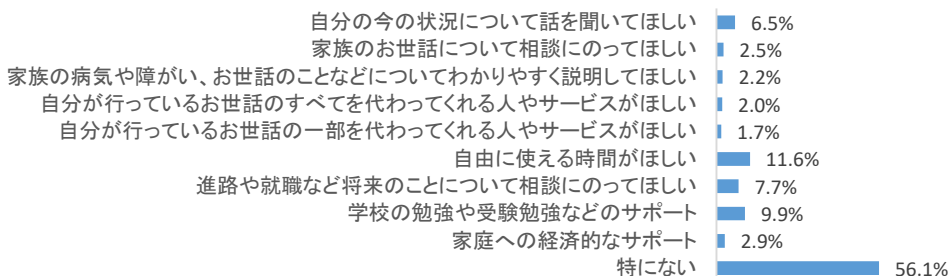
休日 1日あたりの世話時間



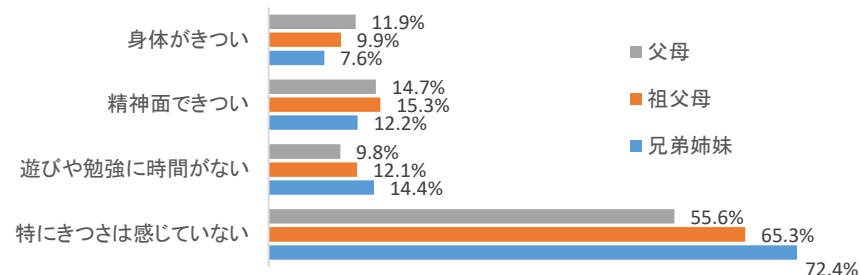
世話を始めた年齢



学校や大人に助けてほしいことや手伝ってほしいこと



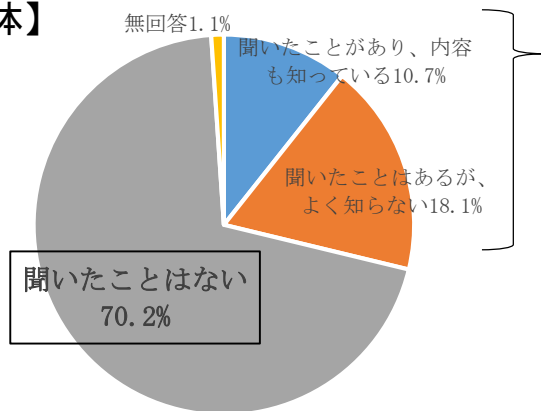
世話をしている家族別の世話をすることに感じているきつさ



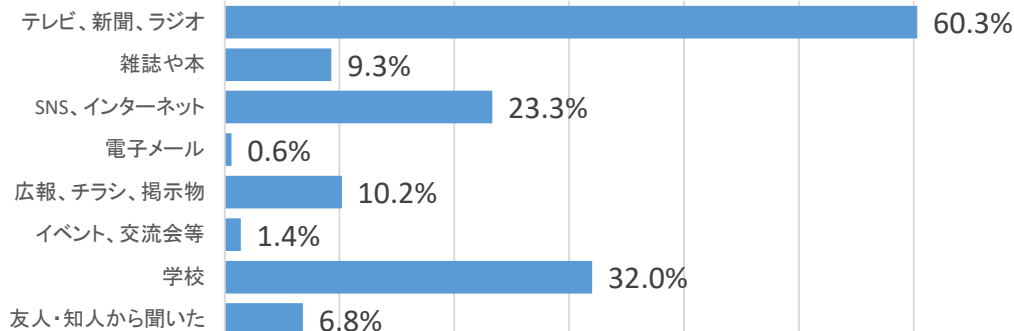
# ヤングケアラー等に関する実態調査 ～全体調査の主な結果③～

- ヤングケアラーの認知度は低く、「聞いたことはない」と回答したのは、回答者全体で**70.2%**（[参考]国調査 中2：84.2%、高2：86.8%）
- 聞いたことがある人がヤングケアラーについて知ったきっかけは、「テレビ、新聞、ラジオ」がいずれの学校種でも最も高く、次いで高いのは「学校」であった。

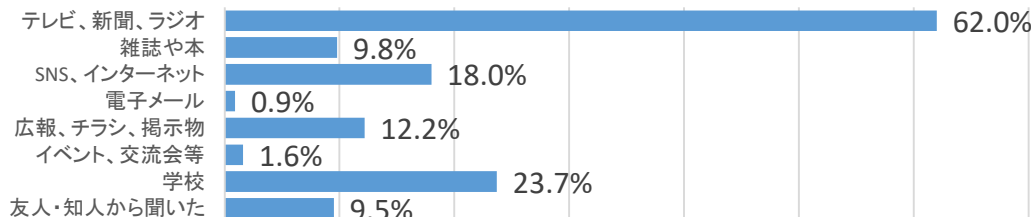
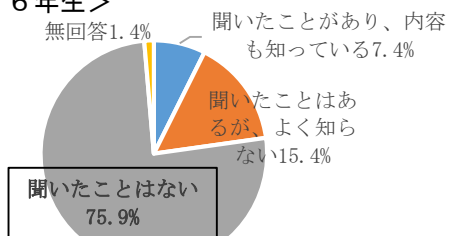
## 【全体】



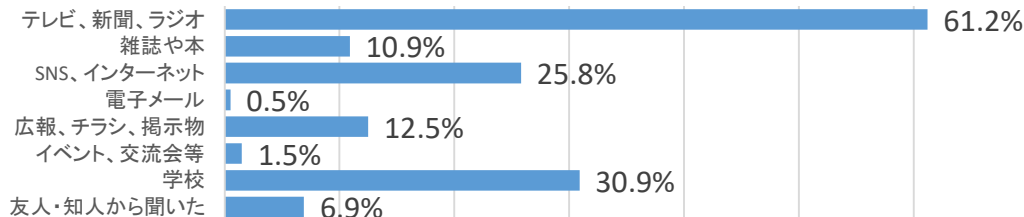
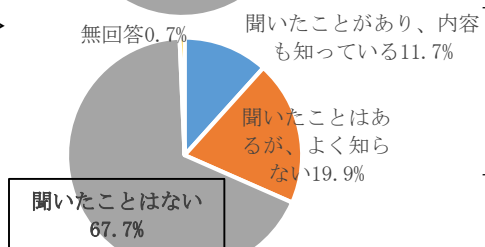
## ヤングケアラーについて知ったきっかけ



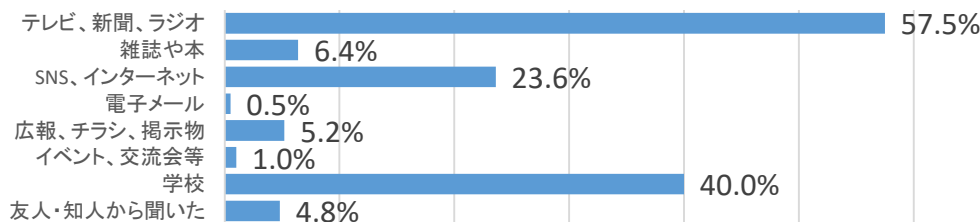
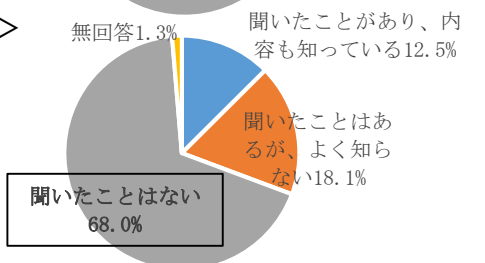
## <小学校5・6年生>



## <中学生>



## <高校生>



# ヤングケアラーに関する実態調査の考察

## 1. 大分県内での支援が必要なヤングケアラーについて

- 全体調査の結果、回答者全体の約1.3%が、世話をしているため、やりたいけれどできていないことが「ある」と回答している。
- この結果を今回の調査対象者（小学校5年生～高校3年生：79,550人）に当てはめると、世話をしていることで困りごとを抱えている児童・生徒が約1000人いることが推計される。
- 特に、世話をしていることで、「学校に行きたくてもいけない」、「進路変更を考えざるを得ない」等の深刻な影響が出ている児童・生徒も存在することから、早急な対応が求められる。

## 2. 周囲の気付きについて

- 全体調査の結果、上記のとおり、世話をしていることで困りごとを抱えている児童・生徒が約1000人いることが推計される。
- 一方、市町村要保護児童対策地域協議会における調査でヤングケアラーとして共同管理台帳に登載されており既に支援につながっている件数が67件、先行調査で周囲の大人がヤングケアラーとして認識しているのが約300人であった。
- これらの結果を比較すると、児童・生徒本人への調査で明らかになった世話をしていることで困りごとを抱えている児童・生徒の方が、市町村要保護児童対策地域協議会や周囲の大人が把握できているヤングケアラーの数よりもかなり多くなっている。このことは、まさにヤングケアラーが家庭内のデリケートな問題であることから表面化しづらく、周囲の大人が気付きにくいということを示していると考えられる。
- 全体調査の結果、ヤングケアラーの中には学校を欠席する、遅刻・早退する、睡眠不足である等の特徴が見られることもあったので、そういった特徴に留意して周囲の大人がヤングケアラーに気付けるような取り組みが必要である。

## 3. ヤングケアラーの認知度

- ヤングケアラーの認知度については、ヤングケアラーを聞いたことがないと答えた児童・生徒が、国の調査時点では中2で84.2%、高2で86.8%だったのに対し、全体調査では全体で70.2%であったことから、国等がこれまで行ってきたヤングケアラーの周知活動に一定の効果があったものと思われる。
- 全体調査の結果、ヤングケアラーについて知ったきっかけが「学校」という回答がいずれの学校種でも2番目に高かった。このことから、今後ヤングケアラーの認知度を向上させるためには、児童・生徒にとって身近な学校を通じた周知活動も有効であり、取り組んでいく必要がある。
- なお、自由記載欄でも「（全体調査の）アンケートで初めて知った」という記載もあったことから、全体調査で悉皆調査を行ったことも認知度の向上に繋がったと考えられる。